

虎徹

芝愛宕下の日陰町の通りは、戦前までその名残りがあつたが、通りの南北にかけて、ずらりと刀屋が軒をならべている。

文久三（一八六三）年正月のある日、そのうちの一軒の相模屋伊助の店に入ってきた節がある。年は三十前後で、髪を総髪にむすび、紋所は丸に二ツ引両、黒羽二重の羽織に仙台平のはかま、といった立派な服装だが、供はつれていない。それに、粗野で鋭すぎる容貌をみれば、代々高禄をとってきた者の家系でないことがわかる。「へっ」

と、伊助は小腰をかがめて出てきた。おもわず平伏したのは、相手の威にうたれたといつていい。「どういうお申しつけでございましょう。承りますでござります」

「そのほうの店に、虎徹はないか」と、武士はいった。

伊助は、こまったな、とおもった。じつは無が、無い、というのはあきんどの禁句である。

「ただいま、こちらのほうには置いておりませぬが、早速手配してお目にかけてうございます。して、おもとめの品はどのような」

「いや、虎徹でありさえすればいい」

大小いずれでもかまわぬ、と武士はいうのである。しかし、虎徹は、若い頃の作刀と晩年のそれとは、値がうんとちがう。一刀数百両というものである。伊助は、この武士の肚積りが、どれほどかをきいておきたかった。

「おそれながら、どれほどのお心積りでいらっしやいましょう」

「二十両」

（こいつは田舎者だな）

虎徹が、いまどき二十両やそこらであるはずがない。が、伊助は丁寧な頭をさげて、

「よろしゅうございます。して、どちらへお届けに参上すればよろしゅうございましょう」

「小石川の柳町の坂の上に試衛館という道場がある。そこにいる。私の名は、近藤という」

「はい、近藤さま」

伊助は気軽に叩頭した。眼の前の武士が、ほんの数カ月後には、京にのぼって新選組局長として京洛を戦慄させる男になってゆくとは、神ならぬ伊助には知るよしが無い。

「火急にだぞ」

「承知しましてござります」

伊助はすぐ同業仲間にくらべりして、虎徹の有無をしらべた。

が、返事はどれもこれも思わしくない。

もともと、「虎徹とみたら偽とおもえ」とこの業界でいわれているほど、虎徹にはにせものが多い。贋物が多いのはそれだけ需要も多いのだ。

「二十両で虎徹？」と同業者で嗤う者もいた。「それア、お前さん、むりだ。贋物の上作でもそれくらいはするよ」

「なに、わかってるぞ」

伊助もふるい商人だから、それは百も承知である。

虎徹は江戸初期の刀鍛冶で、正しくは、長曾禰コテツ入道興里（最初、古鉄、晩年は厩鉄）。

もともと越前の人で、はじめはすぐれた甲冑師であった。ところが大坂の陣がおわってから甲冑の需要がなくなったため、決意して江戸に出、刀鍛冶に転向した。このとき五十である。晩年に転業してしかもその道で名人の名をのこすなどは、奇蹟にちかい。底知れぬ天才だったのであろう。七十余歳で死ぬまでのあいだ、作刀の上でいくつかの前人未踏の境地をひらいている。が、作品の数は多くはない。

虎徹の鍛刀は、姿こそわるい。しかしその鋭利なことは、平安、鎌倉の古鍛冶でもおよぶものはすくないといわれている。

石灯籠切

という虎徹の名品がある。かれの晩年、久貝因幡守（忠左衛門）という大旗本が虎徹に注文した

正岡子規は病床ですでに思いついていた。欄外文学というのは面白いと考えていくんです。

彼は自分の病気の苦しみから発して、考えを展開していくうちに病気を忘れてしまう。欄外文学というアイディアに取りつかれると、そのことについて夢中で書き出す。それがちゃんとした文章になってしまふんですね。そういう人でした。

大体、人はものを書くとき、頭の中でじっくり考えをまとめ、内容を決め、さらにどこからどう書き出そうかなどと考えて、やっぱり難しいからやめよう、ということになるのが普通なんです。ところが正岡子規にはそんな暇はない。明日死ぬかも知れない。だからどんどん書いていく。それがすばらしい文章であった。そのことの持つている意味は実に大きい。現代の日本の多くの人々、特に教育に携わるような人々は、子規を勉強して貰えば、基本的には文章を書く心得はもう充分じゃないかと思うくらいです。

正岡子規がこれだけの大きなことをやったことの意味は、どういうことかというところ、ぐずぐず考え込まず、やろうと思ったなら、ぱつと始めたんですね。たとえば、自分の文章がある日新聞からはみ出してしまった。悲しくて悲しくてたまらん、どうしたらいいだろう。——そこで自分の文章は短いのだ、欄外だっていいんだから、欄外にもっていけないかなと思う。そこまでは自分のことにかかわっているんですけど、欄外に置いたらどうかと思った瞬間に、「欄外文学」というものがあつたら面白かろうと、こういうふうを考える。もうすでに自分自身を離れてるんです。その一般論になっていく過程がすばらしい。最初のモチーフが、ぐんぐん大きなテーマになっていくんです。そういう頭脳でした、この人は。

なぜ、そんなふうに出来たかというところ、実は若いときからものすごい勉強家だったからなんです。今日の教育の世界で正岡子規の教訓というのを生かそうと思つたら、やはり子供をちいさいときから勉強家にしなきゃ駄目です。学校で教え込まれたことをただ記憶するのは、これは勉強家の反対でありまして、怠け者なんです。そうではなく、自分でこれが大事だつてことを見つけたら、夢中になって突っ込んでいくというのが、ほんとうの勉強家であつて、正岡子規はまさにそういうタイプの人でした。子規だけでなく、明治時代の、我々が知っている限りの立派な仕事をした人々は、一人残らずそうです。

紙屋院と流し漉き

平安京都遷都後の大同年間（805～9）、山城国にあった紙戸が廃止され、図書寮の別所（付属）として、官営の製紙場である紙屋院が、野宮の東方に移設された。隣接する河川は、紙屋院の所在にちなんで紙屋川と名づけられた。一般に「流し漉き」における日本独特の製紙技術は、9世紀の初めには、紙屋院によって完成されていたと考えられている。昭和35年に行われた正倉院の紙の調査に参加した町田誠之氏は、『正倉院文庫』の弘仁2年（811）の「勘物使解」の用紙に、流し漉きの跡が初めて見られると指摘される。

流し漉きとは、濾水性の漉き簀を用いて、紙料を簀に汲み込んだり、捨て戻したりして、簀の上に紙層をつくる漉き方で、日本、中国、朝鮮半島など東アジアで発達した漉き方であるが、日本と中国・朝鮮では簀の形状や動かし方が異なっている。日本では、横長の漉き簀を用い、「化粧水」と「捨て水」によって紙の表裏に薄い紙層をつくる。紙の厚みを出す中間の部分では、しっかりと粘剤（ネリ）を効かせ、汲み込んだ紙料の繊維同士を絡ませるため、簀を十分に振って均一な紙層をつくり、不要な紙料を捨て、また次の紙料の汲み込みを必要な紙厚が得られるまで繰り返すのが、日本の流し漉きの特徴である。これに対し、朝鮮では縦長の漉き簀を左右に振り子のように揺らし、紙料の汲み込みと捨てることを交互に繰り返しながら、一定の紙厚が得られるまで漉き簀を往復させて抄紙する方式である。

日本では、雁皮を混ぜることによって、繊維が均一に分散して操作がしやすくなり、良質の紙が漉けることから、紙漉きの工程に粘剤を使うことが考案され、「流し漉き」が始まったと考えられている。トロロアオイやノリウツギから採取した粘剤を紙料液に混ぜると、水が簀から落ちる速度がゆるやかになるため、紙料液を縦横に揺り動かして、長い繊維をよく絡み合わせ、繊維の配列の美しい艶のある強い紙を漉くことができる。さらに薄い紙を漉きやすいのも特徴である。

このように、紙屋院によって日本独自の流し漉き法が確立された結果、全国で和紙の生産が促進され、多量の和紙を利用した王朝文化が大きく花開くことになる。

419. マメザクラ (フジザクラ、ハコネザクラ)

[サクラ属] *Prunus incisa* Thunb. (漢) 豆桜

【分布】本州の関東南部、甲信地方、静岡県東半部に分布。【自然環境】温帯の山地にはえ、富士、箱根地方に多く、また、植栽される落葉低木～小高木。【用途】公園、庭園に植え、盆栽によく使われる。【形態】高さ3～5m、樹皮は暗灰色で小枝は細くて多数分枝する。若芽は緑茶色を帯び、葉は倒卵形、長さ3～5cm、先は鋭くとがり、縁に欠刻状のきょ歯があり、両面に伏毛を散生する。蜜腺は葉身基部にある。3～4月、歯の出る前、または同時に、白色～微紅色、花茎2～2.5cmで小輪の5弁花が1～3個散形状につき、小花柄に毛を散生する。ふつうはがく筒と花柱に毛がなく、がく片は卵形で、雄しべは35本内外ある。果実は楕円状球形、径約0.8mm、5～6月に黒紫色に熟し、甘味がある。【特性】陽樹。適潤地を好むが、やや乾燥地でも育つ。成長はやや遅いが、若木のうちから花をつける。

【植栽】繁殖は実生またはさし木により、さし木は容易。

【管理】比較的病害虫が少なく、小樹形に保てる。【近似種】リョクガクザクラ 'Yamadei' は歯やがくが鮮緑色で花は純白。変種のキンキマメザクラ var. *kinkiensis* は中部地方以西、近畿、北陸に分布し、マメザクラよりガク筒が細長い。【学名】種小名 *incia* は欠刻のある、の意味。和名マメザクラは小形のサクラの意味。

754. サンショウ (ハジカミ)

[サンショウ属] *Zanthoxylum piperitum* (L.)

DC. (*Fagarapiperita* L.)

(英) Japanese Prickly Ash (漢) 山椒

【分布】北海道、本州、四国、九州、朝鮮半島南部に分布する。【自然環境】山地、丘陵などの林内に自生するほか、人家にも植栽される落葉低木。【用途】器具材(すりこぎ)、果実を香辛料、駆虫剤、健胃薬、若葉は食用。【形態】幹は高さ2～3mとなり、よく分枝する。若枝は淡緑色、短毛があり、葉柄基部に対生する長さ0.5～1cmのとげがある。次年枝は灰黒色で皮目が目立つ。芯材は黄色。冬芽は裸芽で球形。葉は互生し、奇数羽状複葉で長さ5～15cm、葉軸下面に曲がった小刺がある。小葉は5～9対あり、卵形長楕円形で鈍頭または凹頭、長さ1～3.5cm、縁に短い鈍きょ歯があり、くぼみに透明な油点がある。上面に短毛が散生する。葉をもむと特有の強い芳香がある。開花は4～5月、短い新側枝に長さ2～5cmの小さい円錐花序をつけ、多数の黄緑色小花をつける。花被片(がく片)は広皮針形で長さ0.2cm、雌雄異株で、雄しべ5～6個。雌花には2～3個の離生した子房がある。果実はさく果で、楕円状球形、長さ約0.5cm、赤褐色でしわが多く、裂開して、黒色楕円状球形で0.35cm、光沢ある種子を2～3個つける。【近似種】アサクラザンショ *f. inerme* はとげのほとんどない品種。リュウジンザンショウ *f. ovalifoliolatum* は小葉が卵形で3～5個のもの。

【学名】属名 *Zanthoxylum* *Xanthoxylum* と書き、*xanthos* (黄色) + *xylon* (材) で黄色の芯材に基づく。種小名 *peritum* はコショウのような、の意味。